

氏名・(本籍地)	山田道行(東京都)
学位の種類	博士(人間学)
学位記の番号	甲第63号
学位授与の日付	平成21年3月16日
学位論文題目	心理臨床・教育実践と時間 —「時間意識」に着目した人間理解と対人援助の工夫—
論文審査委員	主査 滝川一廣 副査 小林隆児 副査 村瀬嘉代子

山田道行氏 学位請求論文審査報告書

「心理臨床・教育実践と時間」 —「時間意識」に着目した人間理解と対人援助の工夫—

論文の内容の要旨

第1部の基礎研究では、時間論の先行研究の検討と整理に加え、外国も含め、それぞれ特徴の異なる具体的な3事例の分析を行っている。それが研究Ⅰで、外国居住者と比較し、地域・文化の違いによって時間感覚が違い、その違いは生活習慣の細部に浸透していることが明らかにされる。また、日本社会の特徴として「時間通りに運行する」ことを前提としていることが示された。この部において社会的な時間体験と個人としての内的な時間体験との対立と統合とに人間の生の普遍性・本質性を捉えんとする著者の基本的視点が明らかにされる。

第2部では、まさに時間意識の形成途上にある幼児期を研究対象にしている。発達的な視点からの研究で、幼稚園(研究Ⅱ)や公園(研究Ⅲ)での関与的観察を通して、修正グラウンデッド・セオリー・アプローチで分析している。家での時間と園や公園での集団の時間との二重性を幼児は体験している。その体験を通しての時間意識の形成過程とその形成を支えるまわりの関わりを調査分析している。

それに併せて、発達の障害をもつため社会的な時間体験の共有に遅れた幼児の事例研究(研究Ⅳ)を行い、この調査研究を心理臨床の実践につないでいる。時間意識の問題に発達的な側面から取り組んで、遅れをもつ幼児の療育のあり方を具体的に示したものである。

この第2部では幼児の観察記述が実に生き生きとしている。時間とは本来人間の生活体験に根ざしたもので、子どもの時間感覚を豊かに育むためには、制度としての時間を教えるよりも、生活を大切に味わい生きる体験の積み重ねを与えることが重要と結論が述べられている。

第3部では、学校が社会的な時間体験の場であり、社会的な時間意識を涵養する場として機能していることに着目し、そこに適応しきれない中学生たちに心理臨床的、教育実践的に関わってきた体験の詳細な記述と分析がなされている。研究Ⅴで、学校の時間に合わせる手が苦手な中学生19事例を著者自身

の関わりを通して分析している。さらに研究VIで、19事例のうちから2事例を選んで長期経過をたどって詳細な分析をしている。これらの分析の結果から、公の制度的な時間と個人の時間をどのように折り合わせるかが中学生の課題としてあること、第2部の結論と同じく、ここでも外からの統制は時間の折り合いをつけるうえで本質的な解決とにならないこと、学級の中に居場所をみつけ周囲と時間を共有できる体験を工夫することが支援となることが明らかにされる。

第4部が総合的考察で、社会的な時間と内的な時間とのバランスをいかにしてとってゆくか、時間を量的なものではなくいかに質的なものとして生きていくかが、人生の大きな課題だと著者は結論づけ、そこからあるべき教育実践や臨床支援の道を探っている。またライフサイクルと時間という観点から、幼児期から思春期まで対象とした本研究に加え、中年期以降の時間体験を研究するという次の課題が提示される。

審査結果の要旨

文体が平明で、「時間論」という哲学性の高い、抽象的で晦渋になりやすいテーマに踏み込みながら、とても読みやすい論文となっている。論旨も明解である。純粋に哲学的に読めば、なお厳密なディスカッションや細部にわたる検討の余地があるうけれども、むしろ、そのようなスコラ的な議論の森に入り込むのを避けたところにすぐれた臨床性が認められる。テーマをよく消化した上で、無理な背伸びをせず、心理臨床や教育実践の身の丈にあったところで実地に役立つことを考えようとする著者の実践的な姿勢が見て取れる。

本論文ではフィールドワークおよび学校での教育実践の事例研究的な分析に力が注がれ、それが論考の主要部分を構成している。その事例の記述がこまやかで明確で、しかもその分析が高いレベルに達している。たんなる経験論ではなく、第一部で掘り下げて吟味された時間論的視点が、事例との関わりと分析のしっかりした方法原理となっているためである。つまり、方法と考察の骨組みがしっかりしている。

また、関与的観察や具体的な事例との関わりを中心とした研究であるが、それが単なる実践主義的なドキュメントや経験論に留まらず、客観妥当性をもった説得力のある学術論文となっている。先に述べた観察記述のこまやかさと明確さに加え、修正グラウンデッド・セオリー・アプローチなど質的研究の方法論が的確に用いられ、考察に客観性を与えているためである。また、事例も19事例と数が多く、そのひとつひとつの記述や分析もていねいで、事例分析による臨床研究としてじゅうぶんな信頼性をもっている。

一般には、一方で哲学的、思索的な難解なテーマとして扱われるか、他方は体内時計、サーカディアンリズムなど生物学的、即物的なメカニズムとして扱われる「時間」というものを、そのような抽象的な事象としてではなく、生活の体験の相のもとで捉えたのが本研究である。その視点から生活や人生のなかで、人間にとって、あるいは生きることによって時間とはなにか、日々の生活のなかに「時間感覚」や「時間意識」や「社会的・制度的な（つまり規範としての）時間」がそれぞれどのように現れ、どう体験されるかをていねいに分析したところに本研究の大きな特質がある。

心理臨床的にいえば、不登校をはじめとする学校不適応を対人関係や自己意識の文脈から捉える研究はすでに数多いけれども、時間体験・時間意識の切り口から捉えて心理的援助の道につないだ研究はおそらく本研究が嚆矢で、そこにも優れた独創性と有用性が認められる。

博士論文として十分評価でき、刊行するに値する研究である。本論文中の公園での幼児の遊びの関与的観察とその考察の部分は、独立した論考として雑誌「そだちの科学」（日本評論社）から執筆依頼を受け、

まもなく刊行の予定である。臨床心理学の博士課程での研鑽はもとより、中・高等学校教員として長く積み重ねられてきた著者のキャリアが結実したかけがえのない仕事である。